

【目的】住居内の不快なおいとして、生ごみ臭やトイレ臭が多くあげられる。生ごみ臭は、材料や管理状態によって臭気の強度や発生量が異なると考えられるが、それに関するデータは少ない。そこで、家庭から廃棄された、生ごみの臭気の発生量と基本的な感覚特性を把握することを目的として測定を行った。

【方法】試料については、家庭から廃棄された直後の生ごみを材料別（野菜類、果物類、魚類、お茶、残飯、卵の殻など）に収集し、各々の重量を測定した。次に、各材料を半分に分け、半分は材料別に、残りは全部まとめて密閉容器の中へ入れた。その容器を16～17℃の部屋へ4日間放置し、容器の中から出てくる臭気の経時変化を廃棄直後、1日後、2日後、3日後と測定した。測定項目は、官能検査による臭気濃度（三点比較式臭袋法による）および臭気の質に対する評価（15個の形容詞、生理的精神的影響と身体部位の不快感10項目について）で、さらに「においセンサー」による測定も行った。

【結果】臭気濃度については、魚、かに、えび、卵といった動物性食品からの生ごみの臭気濃度は、時間経過とともに上昇する傾向が示され、これらの材料では、臭気濃度とにおいセンサー直との対応がみられた。野菜については、野菜の種類にかなり左右され、残飯として出たごはんは、廃棄直後、1日後の方が臭気濃度が高くなった。このように、動物性食品と植物性食品とでは、臭気の発生特性において差があることが認められた。質の評価では、不快性について、特に材料の全体で日数経過とともに高くなる傾向があった。

今後は、臭気発生量と温度との関係、材料の含水量との関係などを検討していきたい。